

研究課題

知性・創造性を育む

教育課程の編成と校長の在り方

I 趣 旨

学校は、子どもたちに知・徳・体のバランスとれた「生きる力」を育むため、基礎的・基本的な知識や技能の習得、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成が求められている。そのために校長は、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善を進め、実施上の諸課題の解決につながる方策を明示し、組織として改善することに努めてきた。これからは、校長はその成果と課題を把握し、改善を図っていくことが大変重要である。

先行き不透明な21世紀を生きる子どもたちに、困難に立ち向かい、たくましく生き抜く力を育む取組を進めることが重要な教育課題である。それは単に知識の獲得だけではなく、それを活用し柔軟な思考や粘り強さと先見性をもって解決に当たる能力、つまり、新しい知恵やものを生み出すしなやかな知性と豊かな創造性を身に付けさせることが求められている。

そこで、校長は、柔軟性や粘り強さ、先見性をもって解決に当たる能力や新しい知恵やものを生み出す力を身に付ける教育課程の成果と課題の把握に努め、その結果をもとに、教育課程の編成・実施・評価・改善に向けての具体的方策を明らかにする必要がある。

これからの校長のリーダーシップの在り方についての討議を深めたい。

II 研究発表と研究協議

1 研究発表

「しなやかな知性と創造性を育むための
学習指導と教育課程編成に向けた校長の在り方」
上川地区 中富良野町立本幸小学校 小山田 雅春

(1) 研究の視点及び視点に関わる実践について

① 視点1〈学習指導〉

- 全教職員が「チーム中富良野」として、子ども



もたちに関わり合う学習指導場面の設定と工夫
～「我が校の子どもたち」から「我が町の子どもたち」への意識改革～

- * 「しなやかな知性と創造性に富んだ力」を本町の子どもたち一人一人に身に付けさせていくことを全教職員に共有させていくために下記の2点を押さえた。

- ・子どもたちの夢や目的を把握した上での、学習意欲の高揚と接続化
- ・本町の子どもたちが学び合う場の設定及び学校枠を外した多様な学習指導場面の設定による教職員の「チーム中富良野」としての仲間意識や士気の高揚

② 視点2〈教育課程〉

- ふるさと学習を通し、しなやかな知性と創造性を育む教育課程の編成

～ふるさと学習を通し、しなやかな知性と創造性を育む体験活動を位置付けた教育課程の編成・実施・評価・改善～

- * 本町の子どもたち一人一人に本町教育理念並びに教育行政方針でねらう「地域の伝統を大切にすることと柔軟な知性・豊かな人間性を育む教育課程の編成」のため、校長として、指導性を発揮していくことが重要と考え、下記の2点を押さえた。

- ・体験を通して学ぶ知恵と課題探求
- ・教職員の参画意識の高揚

(2) まとめ

① 成果

ア 自校の子どもたちの成長を全町レベルで意識化することにより、自校の実態を多角的・多面的にとらえるようになった。

イ 学校間連携（小学校間交流・小中連携）を推進することで、9年間を意識した中で児童生徒の実態や状況をとらえた指導改善になってきている。

ウ 小学校間交流学习（2年目）の取組が各校の教務主任を中心として徐々に定着し、教職員の「チーム中富良野」としての意識が高まってきている。

② 課題

ア 校長として、各取組のねらいや目的を学校経営方針に位置付け、職員のやらされ感や多忙感につながらないような配慮・工夫が必要である。

イ 本町の児童生徒が9年間の義務教育を終えた時の児童生徒像を明確にし、発達段階に応じて教育課程の工夫・改善を推進する必要がある。

ウ 小学校間交流学习において、教員が単式・複式のいずれの指導もでき得る体制づくりを進める必要がある。

エ 小中連携において、児童生徒交流の目的の共有を図り、教育課程に位置付ける必要がある。

2 研究協議

(1) <視点1>「学習指導と校長の指導性」

- ① ICTの活用が学力向上につながっている。児童15名全員がiPadを持ち、複式授業で活用している。休み時間でも漢字や計算ソフトを喜んでやっている。その子どもの姿に刺激を受けて、最初抵抗感があった年配の教員の方が熱心に活用するようになり、教師力の向上にもつながっている。
- ② 学力向上には、授業を変えていくしかない。児童が活躍する授業にしていけるしかない。校長は個々の指導者の板書を紹介するなど、教員が直接見られない授業を見えるものにするように「つなぐ」のが仕事である。
- ③ 学力調査の自己採点・分析を、「教師にとっては指導力の向上、児童にとっては個別の指導、指導の工夫に繋がる」をキーワードにして、組織的に行えるよう校長が指導性を発揮して、しっかりと進めていく必要がある。同時に、分析結果の活用やそれに基づいた学習指導の改善等が、教職員の自主的な取組になるよう策を立てていくことも大切である。
- ④ 小中連携について、交流・連携会議等を設定していても話し合いを深めていくことが難しく、実効性のあることがなかなか決まっていけないという課題がある。その解決のために、まずはそれぞれの学校の教職員が、お互いの実践を知り合うことが大事である。そこから9年間を見通した子どもの姿を共有し、それに向けての取組を進めていけるように、校長同士も連携を図り、環境を整えていかなければならない。

(2) <視点2>「教育課程上の校長の役割と指導性」

- ① 教職員の参画意識の向上に向けて、仕事の細かなセクションを設け、一人一人に活躍の場を与え、その仕事を具体的に認めていく。この具体的な労いの言葉等から責任感が芽生え、職場が活性化していく。そのためには、校長のこうしたいという明確なビジョンを、口頭なり、間接的に紙面を通して等、いろいろな形で伝えていくことが必要である。
- ② 教職員との対話や面談を通して見えてきた「教職員の多忙感」を課題と捉え、その解消のために、前年度踏襲に囚われず、今まで積み重ねてきた教育活動の目的を明確にし、内容を整理していくことが大切である。
- ③ 教育委員会の姿勢（例えば、学力に関わっての予算の裏付けをしている。教育行政の執行方針の中で柱を明確にして伝えていく。各学校の独自性を尊重する。）を、校長や校長会が受け止め、しっかりと経営ビジョンを立てなければならない。ある意味、トップダウンは必要である。
- ④ 学校の特色ある活動はどんなことがあるのか、地域性のある活動はどのようなものなのか、小中連携または学校間連携をどのようにするのか等々の経営ビジョンをしっかりと明確にした上で、それらを教職員に伝えていったり共有化を図ったりするような努力をしなければならない。その中で、ミドルリーダーの役割をしっかりと明確にした組織を作り、ミドルリーダーを育てていく努力をしていくことも必要である。そのような繰り返しの中で、バランスを保ちながら、最初はトップダウンであっても、徐々にボトムアップへ向かっていく学校経営を進めていくことが校長の役割である。
- ⑤ 市町村ぐるみの取組（スローガン・チーム〇〇）は、学校経営を進める上でとてもプラスになっている。市（町・村）がチームとしてまとまるためには、その市（町・村）の教育委員会がしっかりと指導性を発揮しているということが大切であり、それを受けて校長会でも結束をして、様々な取組をできていることが成果につながっている。
- ⑥ 教職員の参画意識については、教職員が学力向上・学校改善プラン等にどれだけ当事者意識をもつことができるか、また校長が考えるビジョンがどれだけ教職員に伝わるかということが大事である。それができれば、学校はチームとしてまとめ、教職員一人一人の授業力が高まることにより、学力向上につながる。

- ⑦ 小学校同士・小中・幼稚園も含めた連携を通し、様々な事業の公開ができることで、お互いが刺激し合う、切磋琢磨できる状況が生まれ、教師自身の資質・能力が向上していく。そのための基本は各学校の校内研究がしっかりと整っていくことであり、校内研究が確立していくことで、市（町・村）全体に広がっていき、お互いに交流し合う、刺激し合う関係ができてくる。
- ⑧ 校長自身もそうであるが、教師自身が生き生きと夢を語り、その夢の実現に向かって進んでいく姿を子どもたちに見せることで、子どもたちも夢を求めて頑張る子どもに育っていく。
- ⑨ 地域の「ひと・もの・こと」を取り入れた本物を体験することにより、より効果的に探求型の学習を進めることができる。

Ⅲ ま と め

1 討議1「学習指導と校長の指導性」から

- 教育現場では、その実態を複数の物差しでみる必要がある。その年度の6学年の国語と算数だけではなく、自校の6年生の経年変化、個人内評価が重要であり、そのためには、CRTテスト等の実施によるデータの蓄積が必要となる。児童アンケート、保護者アンケート、地域住民アンケート等が有効である。
- 他校の実践や勘と経験による改善ではなく、自校のデータに基づく学校評価等による確かな事実に見識の共有化から、学習指導や教育課程の改善を図ることが有効である。
- 校長による「私のビジョン」から「我々のビジョン」で学習指導の改善を図る必要がある。
- 授業改善なくして学力向上なし。教職員を意図的・計画的に育てる必要がある。
- 家庭を巻き込んで家庭学習や生活習慣の改善を図ることが非常に難しい。その困難を打開する方策に取り組む必要がある。
- 学習規律や家庭学習等の取組には、しっかりと継続できる体制を整える必要があり、管理職は教職員へ、教職員は児童に対し最後まで見届けることが重要である。（言いっ放し、教えっ放しの排除）
- 学校は様々な取組について、何が自校では有効なのか、「集中と選択」から「集中と選択?徹底と継続」をする時期に来ているのではないかな。
- 教職員の意識改革が校長の第一の役割である。

2 討議2「教育課程実施上の校長の役割と指導性」から

- 現在、国語と算数の学習指導と評価、授業改善に目が向いている。重要なことではあるが、他教科はどうなのか。特に、総合学習や特別活動?道徳との関連を図らなければ、見える学力自体の向上にもつながらないのではないかな。
- 教職員は担当する学年や教科には関心を払うが、教育課程全体への関心は薄い。そのため、校長は教育課程全体への関心を高めるため、教育課程を教務主任等の仕事から全教職員が関与するように、特別委員会やプロジェクトチームを組織するなど、組織的な改善を図るためにリーダーシップを発揮する必要がある。
- 校長は報道等の論調に左右され、自校のスタンスを見失うことのないようにする必要がある。特に、教育目標実現へ向けての教育課程のバランスを考慮することが求められている。
- 教育課程の質を高めるために、校長間の情報交流と市町村教委との連携が重要である。
- 校長の仕事は、板書を撮影し教職員へ配布するなど「つなぐ」ことである。

「第4分科会に参加して」

富良野市立樹海小学校 山本 一人

本教育研究大会に、優勝の里日高の地で初めて参加させていただきました。

研究発表では、中富良野町立本幸小学校の、学習指導と教育課程の編成に当たって小中の連携を取りながらの取組について概要が説明されました。校長が指導性を発揮し、「チーム」として連携する体制づくりに向けてのご努力の様子が窺えました。

その後のグループ協議では、「枠にとらわれない柔軟な学習指導の在り方と校長の指導性」という柱に沿って話し合いが進められました。

特に、異校種間の連携についてどのように教育課程に位置付けるかに論議が集中しました。協議では、いかに連携の意義についてしっかりと共通理解を図り、連携の具体的な方策を組織的に立てるか、各校、校長として指導性を発揮しながらどのように取り組まれているか交流を深めました。教職員の経営への参画意識の高揚を促し、ミドルリーダーの機能を土台に組織的に編成、実施に取り組む体制づくりを進めることの重要性とともに、校長先生方の経営に対する力強い信念とリーダーシップを実感させていただきました。